

# 絵かきになりたい

吉井淳二

みなさん、絵をかくのは好きですか。今からしようかいる人は、幼いころから画家になりたいという気持ちを強くもち、日本を代表する絵かきになった吉井淳二です。

一九〇四年（明治三十七年）、鹿児島県曾於郡末吉村（現在の曾於市末吉町）に、淳二は生まれました。淳二は、小学生のころ絵がうまいと言われたおぼえはありませんでした。しかし、決して絵がへたなわけではなく、周りの大人たちがお



【曾於市の位置】



【吉井淳二】

（吉井淳二美術館）

どろくほどの絵をかいていたのです。では、なぜ、ほめられ  
たおぼえがないのでしょうか。実は、それは、淳二のお父さ  
んのせいでした。お父さんは、

「淳二は政治家か医者にするつもりだが、絵ばかりかいて勉  
強をしないから、かいた絵を絶対ほめないことにしている。」

と周りの人たちに話していました。周りの人たちも、お父さ  
んの考えを知っていたため、淳二の絵をほめようと思っても、  
ほめることができなかったのです。

それでも、絵をかくことが大好きだった淳二は、絵をかき  
続けます。かく絵は、決まって馬の絵でした。学校でかいた

---

#### 【関連年表】

一九〇四年 誕生

一九二四年

東京美術学校入学

一九二九年

パリ留学

一九四六年

南日本美術展創設

一九六九年

内閣総理大臣賞受  
賞

一九七八年

二科会理事長就任

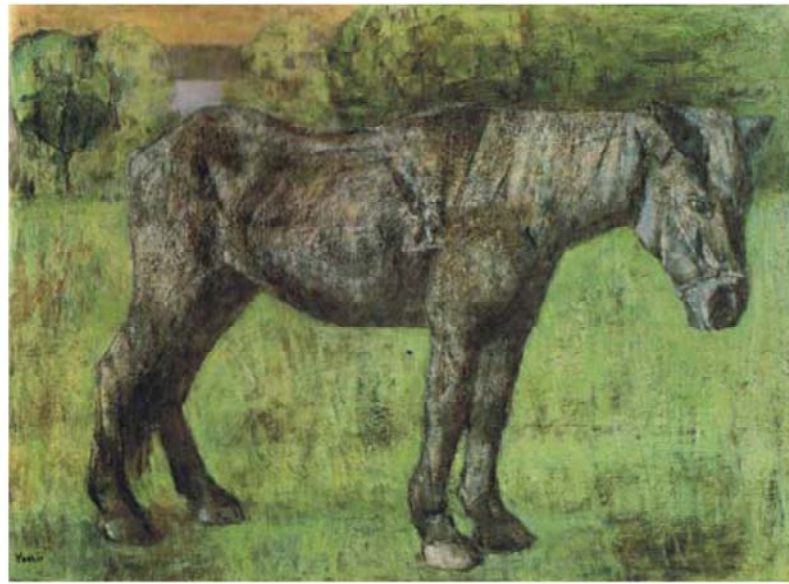
一九八九年

文化勲章受章

二〇〇四年

死去

【馬】



(吉井淳二美術館・淳二が六十歳の時  
の作品)

馬の絵が教室にかざられたことがあり、とてもうれしかったからです。遊ぶ友達がいないときは、地面に棒きれで馬をかいていたそうです。

淳二が十四さいになったある日、心をどきどきさせる絵に出会います。その絵は、ある病院のげんかんにかけられていた緑の木々と山道をえがいた大きな絵でした。その絵をみた淳二は、それまでよりもずっと絵をかきたくなり、いろいろな絵をみることに興味をもちました。淳二の心に、絵かきになる夢がどんどん大きくふくらみました。

そしてある日、淳二は勇氣を出して、「絵かきになりたい。東京の絵の学校で勉強してみたい。」と、初めてお父さんに打ち明けます。お父さんの考えを知っていたので、すごく反対されるだろうと思っていました。やっぱりお父さんは反対しました。

### 【涙の女たち】



(吉井淳二美術館・淳二が五十九歳の時の作品)

「絵の学校なんて絶対に許さん。学力をつける学校か医者になる学校に行け。それがお前のためだ。」

と、ふきげんな様子でした。「絵かきでは一生苦勞するばかりだ。」と、子どもの将来を心配していました。

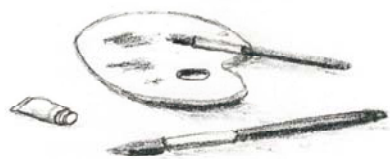
しかし、淳二はあきらめませんでした。絶対



に許してもらおうとねばり強くお願いしました。そんな様子を見ていたおばあさんが、「淳二の好きなことならさせてやればいい。」と応えんしてくれました。めったに口を出すことのないおばあさんの言葉を聞き、ようやくお父さんは淳二の願いをきくことに決めました。何日かたってお父さんは、絵の道具をかうようにと、たくさんのお金をわたしました。絵かきになることに反対していたお父さんは、実は、淳二の絵のうまさをだれよりも分かっていたので。そして、いつか淳二が絵かきになりたいと言ったときには、助けてあげようという気持ちがあったのです。このように、絵かきになり

【考えてみよう】

画家になることを許してもらおうと、ねばり強くお父さんに話をする淳二は、どんな気持ちだったのだろうか。



たいという強い思いをもっていた淳二は、それからずっと絵をかき続けました。そして、たくさんの賞を受賞し、日本を代表する絵かきになりました。また、鹿児島の人たちに絵のかきかたを教えることにも力を入れ、たくさんの優れた絵かきを育てました。

最後に、吉井淳二は、自分の人生をふり返り、次のような言葉を残しています。

「わたしはただ絵をかくことが好きだった。小さいころの絵かきになりたいという夢をずっと大切に生きてきた。」  
わたしたちも、夢を大切にしていきたいですね。

---

【考えてみよう】

淳二は、みなさんにどんなことを伝えたいと思ったのだろうか。